

**大阪狭山市内遺跡群  
発掘調査概要報告書17**



平成19年(2007年)3月

大阪狭山市教育委員会

## 序 文

大阪狭山市内には大阪府の史跡名勝に指定されております狭山池をはじめとして、数多くの文化財があります。狭山池では平成の改修に伴う発掘調査によって多くの遺跡、遺構が出土し、下層東樋・中樋等が大阪府の有形文化財に指定されています。平成13年3月にオープンした大阪府立狭山池博物館では、大阪府・大阪狭山市共有の文化財であるこれらの遺構や遺物を展示し、多くの方々にご観覧いただいております。

本市教育委員会では、平成2年度より個人住宅などの建築に伴う発掘調査を継続的に実施してまいりました。本年度は陶邑窯跡群などの遺跡で調査を実施し、貴重な成果を得ることができました。本書はこれらの調査成果をまとめたものです。本書が地域の歴史を考える上での一助となれば幸いです。

調査にあたりましては、建築主の皆様ならびに周辺の皆様に多大なご協力を賜り、厚く感謝いたします。

今後とも本市文化財保護行政に対するご理解とご支援のほどを、よろしくお願ひ申し上げます。

平成19年(2007年)3月

大阪狭山市教育委員会

教育長 岡 本 修 一

## 例　　言

1. 本書は国庫の補助を受け、大阪狭山市教育委員会が平成18年度事業として大阪狭山市内で実施した個人住宅建築等に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査の結果をまとめた概要報告書である。
2. 本書に収録した調査は以下の通りである。
  - 1 陶邑窯跡群 06-01区、06-02区、06-03区
  - 2 池尻城跡 06-01区
  - 3 範囲確認調査 060925区
3. 発掘調査は大阪狭山市教育委員会教育部社会教育・スポーツ振興グループ 植田隆司が担当した。現地調査においては、鳥山文夫、米澤孝成ら各氏のご協力を得た。
4. 内業調査については植田隆司が担当し、若宮美佐、橋本和美、笹岡裕里子ら各氏のご協力を得た。遺物の撮影は有限会社阿南写真工房に委託した。
5. 本書の執筆・編集は植田隆司が担当した。

## 本文目次

(頁)

序 文 大阪狭山市教育長 岡本修一

例 言

はじめに .....	1
1. 陶邑窯跡群 .....	8
06-01区 .....	9
06-02区 .....	12
06-03区 .....	14
2. 池尻城跡 .....	17
3. 範囲確認調査 060925区 .....	19
まとめ .....	22
報告書抄録 .....	23

# はじめに

大阪狭山市内では1960年代以降に急激な人口増加が生じ、南部の丘陵地を中心に住宅開発が進んだ。1980年代以降はそのころの勢いは衰えたものの、小規模な開発は盛んである。また、近年では1960年代～1980年代に新築された住宅の建て替えが進んでおり、これらに伴う埋蔵文化財の発掘調査が多い。

つぎに大阪狭山市内の遺跡群が所在するエリアの歴史的環境について触れておきたい。

市域における旧石器時代の資料として、寺ヶ池遺跡で採集された晩期旧石器時代の有舌尖頭器が知られている。また、東野遺跡・池之原地区・ひつ池の各所にて採集されたナイフ型石器もこの時代の遺物となりうる可能性がある<sup>1)</sup>。縄文時代の資料としては、寺ヶ池遺跡・東村遺跡・大鳥池遺跡・へど池・狭山池・ひつ池・上明池・池之原地区で採集された石器・スクレイバーなどが知られており<sup>2)</sup>、当該調査区周辺域が縄文人の狩猟場であったことを伺わせる。付近の縄文時代の集落遺跡としては富田林市に所在する錦織遺跡が著名であるが、旧天野川流域ではこの時期の集落遺跡はまだ確認されていない。弥生時代後期になると旧天野川流域でも集落遺跡がみられるようになる。狭山池の南方約3kmの地点にある茱萸木遺跡は弥生時代後期の高地性集落である<sup>3)</sup>。

古墳時代以降の本市域内における人々の活動の痕跡は、近年の発掘調査成果によって、明確に認識可能なものとなっている。旧天野川流域の沖積低地に立地する池尻遺跡では、溝・土坑・焼土坑など住居跡となる可能性がある遺構とともに庄内式の壺・壺と布留式の壺が出土しており、古墳時代前期までには旧天野川流域に集落が成立していたことを示している<sup>4)</sup>。旧天野川右岸の中位段丘上に立地する狭山藩陣屋跡の下屋敷では、2002年の調査で、自然の谷地形の底部分からTK47型式の須恵器が出土した。古墳時代中期の集落が中位段丘上に存在した可能性が高い<sup>5)</sup>。

古墳時代中期以後、泉北丘陵を中心とした地域で須恵器生産が盛んに行われ、陶邑窯跡群が形成された。5世紀後葉から6世紀前葉までの本市域内における窯の造営は、陶器山丘陵およびその北方に連続する高位段丘の陶器山(MT)地区のみに限定されるようである。発掘調査が行われた市内の窯跡としては、TK47型式～MT15型式の須恵器を生産した陶器山252号窯(MT252・山本1号窯)<sup>6)</sup>がある。また、その南南東約800mの地点には陶器山15号窯(MT15)<sup>7)</sup>がある。増大した須恵器の需要に対応して、6世紀後半の陶邑窯跡群における生産活動はより活発なものとなる。窯体の構築場所と燃料の薪をあらたに確保するため、窯の造営は東方の中位段丘へとその分布域を拡大し、狭山池(SY)地区の窯跡群が形成される。TK43型式～TK209型式の須恵器を生産する狭山池(SY)地区の窯跡には、太満池北窯(SY1・TMN)<sup>8)</sup>・太満池南窯(SY2・TMS)<sup>9)</sup>・狭山池2号窯(SY9・SI2)<sup>10)</sup>・狭山池3号窯(SY10・SI3)<sup>11)</sup>・狭山池5号窯(SY11・SI5)<sup>12)</sup>・池尻新池南窯(SY21・ISS)<sup>13)</sup>・ひつ池東窯(SY25・HTE)がある。窯の造営域が最も東方へと拡大した当該期以降の窯の造営は東除川水系の中位段丘崖より以西で行われており、この谷筋が陶邑窯跡群狭山地区的東端となっている。7世紀に入ると本市域内における

須恵器窯の数は減少するが、狹山池主谷周辺の中位段丘斜面での操業は継続し、東池尻1号窯(SY7・HI1)<sup>14)</sup>・狹山池4号窯(SY12・SI4)<sup>15)</sup>・ひつ池西窯(SY24・HTW)<sup>16)</sup>などが確認されている。

7世紀前葉、狹山池主谷を横断する全長約300m・全高約6mの堤を築くことによって旧天野川(西除川)と三屋川の流れを堰き止め、ダム式のため池である狹山池が造られた。この狹山池を堰き止める堤の直下から、コウヤマキを割り抜いてつくられた桶管を連結する下層東柵が検出された。この全長約60mにも達する底柵の埋設時期は、桶管材であるコウヤマキの伐採年代が西暦616年であることが年輪年代測定法により判明したため、同年以降の非常に限定された時間幅の中に求められることとなった<sup>17)</sup>。狹山池築造以後、その灌漑範囲に位置する下流地域では、美原町平尾遺跡・太井遺跡・丹上遺跡・羽曳野市郡戸遺跡・河原城遺跡など、土地開発の拠点となる遺跡が成立していった。大阪狹山市域では7世紀後葉から8世紀初頭頃、旧天野川右岸の中位段丘上に東野廃寺が建立された。

奈良時代、天平3(731)年に行基が狹山池院と尼院を建てたと『行基年譜』に記されている。これに関連する建物跡は現在までに確認されていないが、おそらくは狹山池北東の中位段丘上、もしくは北西の中位段丘上に占地していたのではないかと想定される。なお、狹山池北堤には行基が改修したと考えられる厚さ60cmの盛土が確認されている<sup>18)</sup>。また、天平宝字6(762)年、狹山池の大規模な改修工事が実施されたことが『統日本紀』に記されている。発掘調査では、狹山池北堤を築造当初と比較して2倍に拡幅する大規模な盛土工事が実施されたことが判明した。また、飛鳥時代に埋設された下層東柵を池側へ約13m延長する工事もこの時に行われたようである<sup>19)</sup>。

平安時代、最澄が写した弘仁10(819)年の記録によれば、僧勤操が「狹山池所」にいたことがわかる。狹山池改修に関わる役所が、狹山池の近傍に設置されていたものと思われる。なお、狹山池下層東柵では、奈良時代にあらためて造られた取水部から、年輪年代測定法によって弘仁8(817)年に伐採された部材が確認されており、勤操による弘仁の改修時に、下層東柵取水部の補修が行われたと考えられている<sup>20)</sup>。また、このデータによって、飛鳥時代に埋設された下層東柵が、補修を受けながらも200年間以上も機能し続けたことが明らかになった。

鎌倉時代、重源によって狹山池の改修が行われた。発掘調査で出土した江戸時代の中柵に使用されていた石材の中から重源狹山池改修碑が出土し、この碑文から、重源の改修が建仁2(1202)年に行われたことが確認された<sup>21)</sup>。同時に出土した石材は、古墳時代の家形石棺や横口式石槨の材を転用したもので、重源の改修時には石柵として利用していたものと推定される<sup>22)</sup>。13世紀前半、狹山池北堤から約400m北方の地では、池尻遺跡が営まれており、水田跡や屋敷地などの遺構が検出されている。また、池尻遺跡の13世紀前半の遺構面は、複数回にわたると考えられる洪水によって堆積した砂層が確認されており、この時期に狹山池北堤は一度決壊したものと考えられる。南北朝の動乱期、狹山池北西に築かれた池尻城の周辺では、延元3(1338)年と正平2(1347)年に合戦が行われた。池尻城跡からは13世紀末から15世紀前半にかけての建物跡が確認されている<sup>23)</sup>。室町時代、天文年間から永祿2年頃(1532年~1559年)、安見美作守によって狹山池の改修が行われたが失敗した旨が、慶長13(1608)年に刻まれた西柵銘板

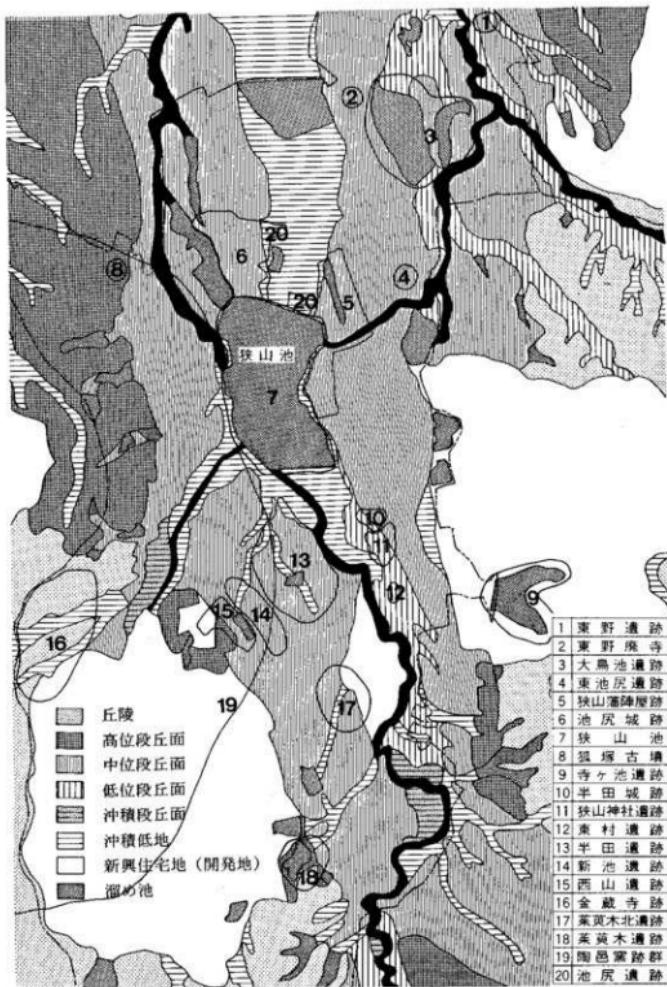
に記されているが<sup>24)</sup>、考古学的にはこれを裏付ける有効な資料がいまだ確認されていない。

文禄5(1596)年に発生した大地震によって狹山池北堤は大きな被害を受けたようで、その時の決壊痕跡が北堤断面調査<sup>25)</sup>等によって確認されている。慶長13(1608)年、豊臣秀頼の家臣片桐且元によって、狹山池では慶長の改修が行われた。この時の改修は、西樋・中樋・東樋をあらたに造り、西除の造り替え・東除の新設、北堤のかさ上げを行う大規模なものであったことが発掘調査によって確認された。この時につくられた西樋・中樋は、江戸時代・明治時代・大正時代と補修を施しながら継続して使用され続けた。元和2(1616)年、北条氏信が狹山池の北東に陣屋を構え、狹山藩が開かれる。氏信は、小田原の北条氏康の子、氏規の孫にあたる。寛永14(1637)年、北条氏宗の代に狹山藩陣屋の上屋敷が造営される。宝永6(1709)年、北条氏朝の代になって、現在の狹山遊園跡地を中心とした地域に、狹山藩陣屋の下屋敷が造営される。以後、明治維新に至るまでの間、狹山藩の陣屋は一貫してこの地に営まれていた。上屋敷における発掘調査では、天明2(1782)年の大火災で形成された焼土層や灰層を境にして、大火以前の下層遺構面と、大火以後から幕末頃までの上層遺構面が確認されている。下屋敷においては、発掘調査件数が少ないが、狹山遊園跡地北側の住宅地で、当時の武家屋敷の遺構が確認されている。狹山遊園跡地の南半部は、幕末以後に作成されたと推定される「狹山藩陣屋下屋敷図」<sup>26)</sup>によると、主として馬場や芝地や畠地として利用されていたようである。

#### 註記

- 1) a. 上野正和「狹山の考古学研究と私」「さやま誌 大阪狹山市文化財紀要」創刊号、1992年  
b. 勝部明生「狹山の石器」「大阪狹山市史要」1988年  
c. 狹山町史編纂委員会『狹山町史』第2巻、史料編、1966年
- 2) 前出註1文献
- 3) 1960年代後半に、近畿大学医学部附属病院用地造成に伴って発掘調査が行われ、現地説明会も実施されたようであるが、詳細は不明である。
- 4) 「狹山池」埋蔵文化財編、「第2章 第5節 下流遺跡の調査 I 池尻遺跡(1)」1998年
- 5) 「平成14年度 狹山藩陣屋跡発掘調査報告書I」「大阪狹山市文化財報告書」26、2002年
- 6) 「山本1号窯発掘調査概要報告書」「大阪狹山市文化財報告書」1、1988年
- 7) 田昭三「陶邑古窯址群 I」「平安学園考古学クラブ研究論集」10、1968年
- 8) 「太満池南窯・北窯発掘調査報告書」「大阪狹山市文化財報告書」5、1991年
- 9) 前出註8文献
- 10) 「狹山池」埋蔵文化財編、「第2章 第4節 須恵器窯の調査 II 狹山池2号窯」1998年
- 11) 「狹山池」埋蔵文化財編、「第2章 第4節 須恵器窯の調査 III 狹山池3号窯」1998年
- 12) 「狹山池 5号窯・狹山藩陣屋跡」「大阪狹山市文化財報告書」31、2004年
- 13) 「池尻新池南窯発掘調査報告書—陶邑窯跡群の調査—」「大阪狹山市文化財報告書」7、1992年
- 14) 「狹山池」埋蔵文化財編、「第2章 第4節 須恵器窯の調査 V 東池尻1号窯」狹山池調査事務所、1998年
- 15) 「狹山池」埋蔵文化財編、「第2章 第4節 須恵器窯の調査 VI 狹山池4号窯」狹山池調査事務所、1998年

- 16) 「ひつ池西窯－陶邑窯跡群の調査－」『大阪狭山市文化財報告書』10、1993年
- 17) 『狹山池』埋蔵文化財編、「第2章 第2節 桁の調査 III 東桟下層遺構』狹山池調査事務所、1998年
- 18) 『狹山池』埋蔵文化財編、「第2章 第1節 北堤堤体の調査 I 北堤断面』狹山池調査事務所、1998年
- 19) 前出註16・17文献
- 20) a.光谷拓実「狹山池出土木桟の年輪年代」「狹山池」埋蔵文化財編、第3章 第3節、狹山池調査事務所、1998年  
b.小山田宏一・中山潔・有井宏子・白江人智・植田隆司『大阪府立狹山池博物館常設展示案内』大阪府立狹山池博物館図録1、2001年
- 21) 『狹山池』埋蔵文化財編、「第2章 第2節 桁の調査 I 中桟遺構』狹山池調査事務所、1998年
- 22) 市川秀之「狹山池出土の桟の復元と系譜」「狹山池」埋蔵文化財編、第3章 第5節、狹山池調査事務所、1998年
- 23) 小林義孝『池尻城跡発掘調査概要』、大阪府教育委員会、1987年
- 24) 前出註19 b 文献
- 25) 前出註17文献
- 26) 都築忠夫氏所蔵。下記書籍等に収録。  
『大阪狭山市史叢書 絵図に描かれた狹山池』大阪狭山市教育委員会、1992年



第1図 大阪狭山市内の遺跡分布と地形分類

第1表 平成18年度発掘調査一覧表

番号	調査期間	遺跡名	位 置	規模m <sup>2</sup>	用途	概 要
1	平成18.6.8	陶邑窯跡群・新池遺跡・西山2号窯	茱萸木4-387-3	90.25	個人住宅	基礎掘削時に立会調査を実施。すべて盛土で遺物・遺構等なし。掘削は盛土内におさまり、遺物・遺構等なし。
2	平成18.6.19	陶邑窯跡群	山本東580-1579-1	921.21	個人住宅	本発掘調査を実施。近世末期の屋敷の台所もしくは土間部分を検出。染付碗・陶器壺・土師質土器が出土。
3	平成18.6.28	池尻城跡	池尻中3-541-2, 538-21	70.84	個人住宅	1.5mx3.2mのトレンチを設定し、バックホーで地表下0.5mまで掘削。すべて盛土で遺物・遺構等なし。
4	平成18.7.20	池尻城跡	池尻自由丘3-127-29の一部	116.71	個人住宅	基礎掘削時に立会調査を実施。すべて盛土で遺物・遺構等なし。掘削は盛土内におさまり、遺物・遺構等なし。
5	平成18.7.31	陶邑窯跡群	茱萸木4-378-15	84.05	個人住宅	基礎掘削時に立会調査を実施。すべて盛土で遺物・遺構等なし。掘削は盛土内におさまり、遺物・遺構等なし。
6	平成18.9.12	陶邑窯跡群	茱萸木4-1160-3, 1160-6	106.63	個人住宅	基礎掘削時に立会調査を実施。すべて盛土で遺物・遺構等なし。掘削は盛土内におさまり、遺物・遺構等なし。
7	平成18.9.12	陶邑窯跡群	茱萸木4-1160-5, 1160-7	106.62	個人住宅	基礎掘削時に立会調査を実施。すべて盛土で遺物・遺構等なし。掘削は盛土内におさまり、遺物・遺構等なし。
8	平成18.9.21	陶邑窯跡群	茱萸木4-1162-4, 1162-5	229.67	個人住宅	基礎掘削時に立会調査を実施。すべて盛土で遺物・遺構等なし。掘削は盛土内におさまり、遺物・遺構等なし。
9	平成18.9.26	池尻城跡	池尻中3-557-27	111.73	個人住宅	ガレージ部分造成および建物基礎掘削時に立会調査を実施。すべて盛土と地山で遺物・遺構等なし。
10	平成18.10.12	陶邑窯跡群	岩室2-185-3	163.35	個人住宅	擁壁基礎掘削時に立会調査を実施。すべて盛土で遺物・遺構等なし。掘削は盛土内におさまり、遺物・遺構等なし。
11	平成18.10.12	池尻城跡	池尻中3-604-13, -26	132.23	個人住宅	未調査のまま事前着工の連絡を受け、現地確認調査を試みるが、基礎工事が進んでおり、遺構の有無等を確認することができなかった。
12	平成18.10.27	陶邑窯跡群	茱萸木3-168-1	191.04	個人住宅	基礎掘削時に立会調査を実施。すべて盛土で遺物・遺構等なし。掘削は盛土内におさまり、遺物・遺構等なし。

番号	調査期間	遺跡名	位 置	規模m <sup>2</sup>	用途	概 要
13	平成18.12.18	金蔵寺跡	今熊3-634-21	99.58	個人住宅	擁壁基礎掘削時に立会調査を実施。すべて盛土で遺物・遺構等なし。掘削は盛土内におさまり、遺物・遺構等なし。
14	平成19.1.11 ～1.12	陶邑窯跡群	今熊6-475-1,475甲, 476	282.82		個人住宅本発掘調査を実施。遺構検出を試みるが、遺物・遺構等を確認することはできなかった。
15	平成19.1.18	陶邑窯跡群	池之原3-989-1, 991-1	142.4		個人住宅本発掘調査を実施。近世～近代の遺構を検出。須恵器壺小片・陶器・古鏡が出土。
16	平成19.3.5 ～3.6	東野庵寺	東野中2-988-2の 一部, 988-4の一部	157.14	個人住宅	本発掘調査を実施。地表下約1.5mから1.8mの深さで近世に形成された瓦溜まりを検出。近世の蓮光寺に葺かれていた瓦が大量に出土。

第2表 平成18年度範囲確認調査一覧表

番号	調査期間	遺跡名	位 置	規模m <sup>2</sup>	用途	概 要
1	平成18.9.25	遺跡外	東池尻3-994, 2551-3, 991-10の各一部	1045.08	宅地造成	3箇所にトレンチを設定。バックホーで掘削して土層断面観察を実施。遺物・遺構等なし。
2	平成19.3.9	遺跡外	半田2-290-4, 291-1, 291-4, 292	921.22	共同住宅	用地中央にトレンチを設定。バックホーで掘削して土層断面観察を実施。地表下1.2mの地山面まで掘削したが、遺物・遺構等なし。

## 1. 陶邑窯跡群

泉北丘陵を中心とした東西約15km・南北約9mの広大な地域に分布する須恵器生産遺跡は、陶邑窯跡群と呼称されている。その埋蔵文化財包蔵地の名称は、日本書紀崇神天皇条にみられる「茅渟県陶邑」の記述によるものである。この広大な陶邑窯跡群は、調査・研究の便宜上、水系ごとに大野池(ON)地区・谷山池(TN)地区・梅(TG)地区・光明池(KM)地区・高藏寺(TK)地区・富藏(TM)地区・陶器山(MT)地区・狹山池(SY)地区に大別されている。陶邑窯跡群全体で確認されている窯跡の総数は850基以上に達する。

大阪狹山市域全体は、この広大な陶邑窯跡群東端の一部に含まれ、旧天野川左岸の段丘斜面および丘陵斜面にMT地区の須恵器窯が、右岸から羽曳野丘陵の間の段丘斜面にSY地区の須恵器窯が造営されている。埋蔵文化財包蔵地として範囲指定している陶邑窯跡群は、MT地区のみに限定しているが、範囲指定を行わずに各窯跡ごとのポイントで埋蔵文化財包蔵地として保護しているSY地区も学術的には陶邑窯跡群に包括されるものである。だが、本発掘調査事業においては、MT地区内に設定した埋蔵文化財包蔵地の範囲をもって「陶邑窯跡群」と呼称しているのでご了解いただきたい。

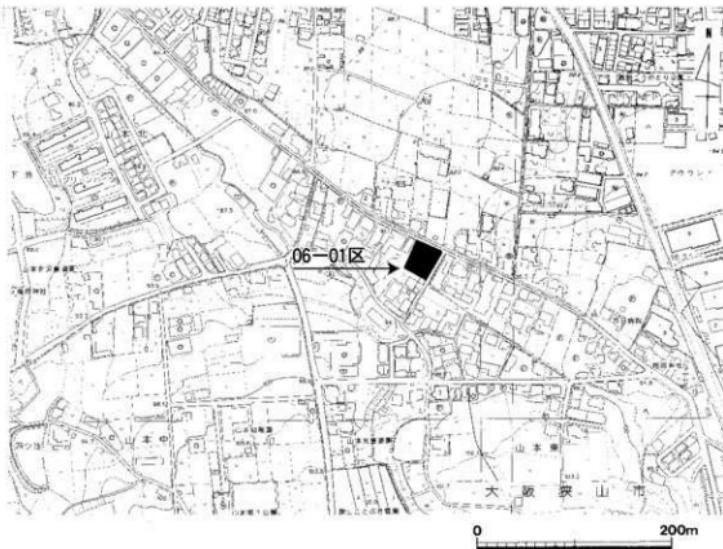
分布調査と発掘調査によって、本市域で確認されている須恵器窯跡は96基におよぶ。SY地区およびMT地区の東端における須恵器窯は、そのほとんどが中位段丘崖の段差を利用して造営された。旧来のままの自然地形を保持している場所もあるが、市内の開発が進んだ結果、ほとんどの窯跡は、溜め池の岸でコンクリート護岸に覆われていたり、宅地化した地域に含まれていたりするため、その遺存状態を容易に確認することができない。このため、個人住宅建築等の小規模開発の機会を捉えて発掘調査を実施し、その実態解明に努めている。

また、当該包蔵地内には、古墳時代の須恵器窯跡のほかにも、近世集落跡等のさまざまな埋蔵文化財が遺されている。近世における狹山の人々の暮らしのようすを考古学的に解明していく上において、こうした地道な発掘調査も重要である。

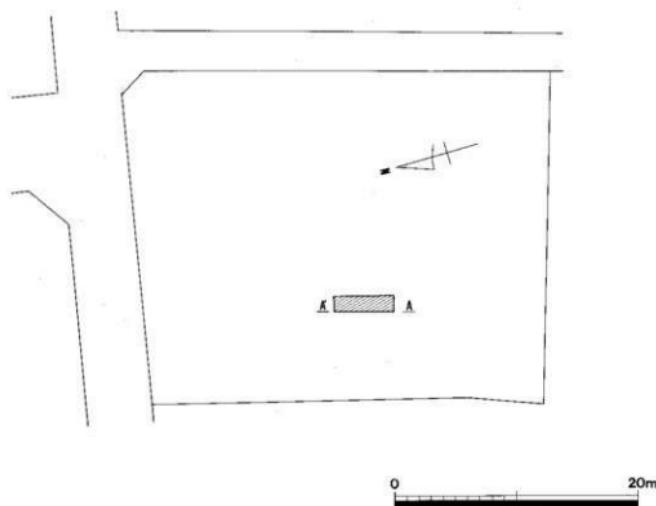
## 06-01区

本調査区は山本東580-1 および579-1 に所在する。住宅の建築に伴って発掘調査を実施した。予定される建築物の規模に合わせて南北5.0m・東西約1.0mの調査区を設定し、機械および人力で掘削をおこなった。確認した遺構面は1面のみである。

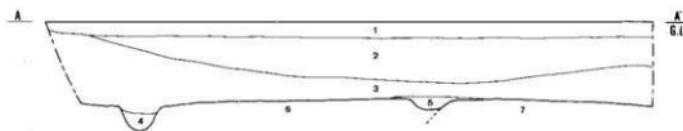
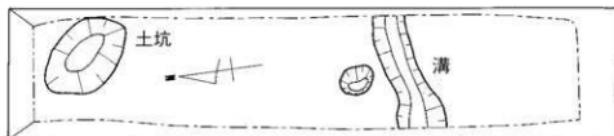
遺構面は現地表面下約60cmの深さに存在する。地表から深さ約10cmまでは整地層が続き、その下層に暗褐色砂質土層が堆積し、その下層に黄褐色砂質土の包含層が存在する。包含層の厚さは10cm~60cm。遺構は淡黄灰色砂質土および明黄色シルト層の上面に形成されている。遺構面では、溝1条・土坑1箇所・ピット1箇所を検出した。溝の幅は最大で40cm、深さは約10cmを測り、調査区を横断して東西方向に伸びている。溝の埋土は暗灰色砂礫土。溝のすぐ北側に径約30cm・深さ約10cmを測るピットがある。調査区の北端で検出した土坑は、長径80cm・短径50cm・深さ約20cmを測る。その埋土は、暗灰赤色砂質土から成る焼土であった。遺構面の大半



第2図 陶邑窯跡群06-01区位置図



第3図 陶邑窯跡群06-01区調査区配置図



- |                 |            |
|-----------------|------------|
| 1. 整地層          | 5. 暗灰色砂礫土  |
| 2. 暗褐色砂質土       | 6. 淡黃灰色砂質土 |
| 3. 黄褐色砂質土       | 7. 明黄色シルト  |
| 4. 暗灰赤色砂質土 (焼土) |            |



第4図 陶邑窯跡群06-01区遺構平面図

は、突き固められたように堅く締まっている。

遺構面直上の包含層中から、染付碗片 1 点・陶器壺片 1 点・土師質土器小片 1 点が出土した。1 の染付碗は口縁がやや外反する中碗で、口径 10.6cm・残存高 4.0cm を測る。胎土は白色で全体に透明釉がかかる。2 の陶器壺は、口径 10.2cm・基部径 10.0cm・残存高 2.1cm を測る。色調は褐色を呈する。

当該調査区は、おそらく、近世末期の民家跡の一部に相当するものと思われる。堅く締まつた遺構面の状況、および検出された遺構の状況から、民家内の台所あるいは土間部分に相当するのではないかと推定している。

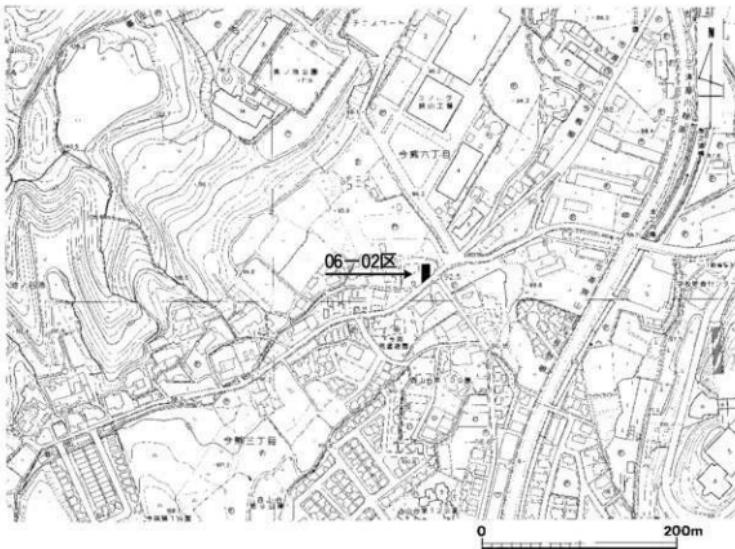


第 5 図 陶邑窯跡群 06-01 区出土遺物

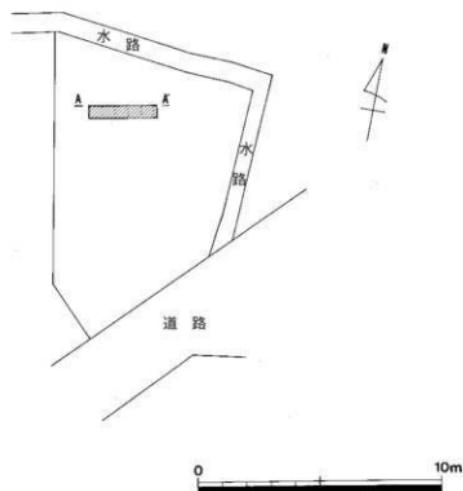
## 06-02区

本調査区は今熊六丁目475-1、475甲、476に所在する。住宅の建築に伴って発掘調査を実施した。予定される建築物の規模に合わせて東西5.6m・南北1.0mの調査区を設定し、機械および人力で掘削をおこなった。06-02区が位置する三屋川左岸の段丘斜面は、陶邑陶器山地区の須恵器窯が多く造営されたところである。コニカ・ミノルタカメラ狭山工場入り口の西側に06-02区は位置するが、この東側では、かつて、MT77号窯が、さらにその北東地点ではMT65号窯が確認されている。これらの窯跡の詳細は不明であるが、おそらく6世紀代に操業していた窯であろうと想定される。いずれも南東向きの段丘斜面に直交して、窯体を構築していたのであろうが、昭和40年代の造成工事の際に立会調査が行われただけで、その一部が現存するのかどうかも不明である。

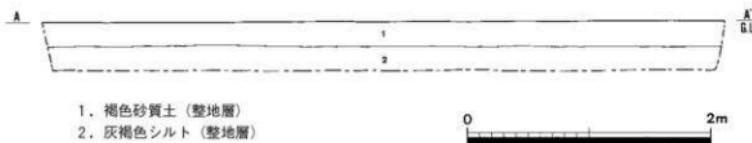
今回の事前発掘調査では、予定建築物の基礎深度である地表下40cmまで掘削を行い、遺構・遺物の有無を確認した。土層断面観察等の結果、今回の掘削は整地層内にとどまるため、前述の須恵器窯跡に関連するような遺構・遺物を検出することはできなかったが、近隣における今後の開発時においても、須恵器窯跡関連遺構の遺存状況を確認するべく、継続的な調査を心掛けたい。



第6図 陶邑窯跡群06-02区位置図



第7図 陶邑窯跡群06-02区調査区配置図



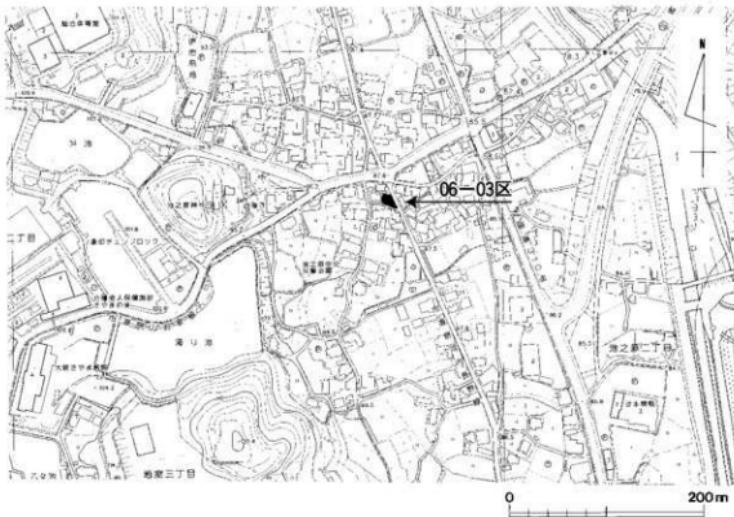
第4図 陶邑窯跡群06-02区土層断面図

## 06-03区

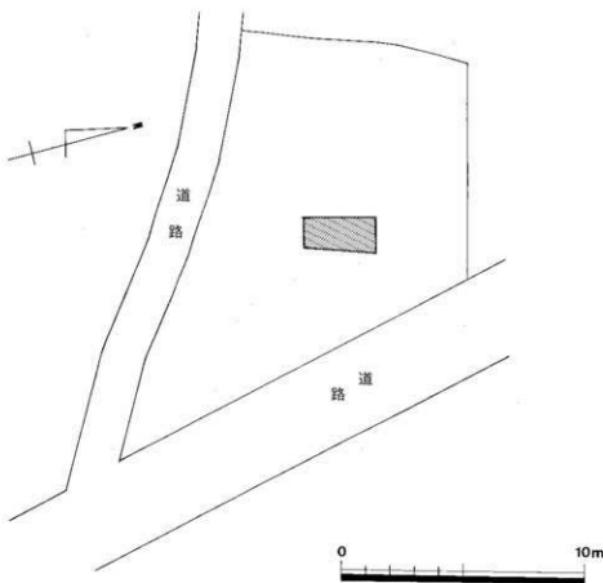
本調査区は池之原三丁目989-1 および991-1 に所在し、池之原の旧道に面している。住宅の建築に伴って発掘調査を実施した。予定される建築物の規模に合わせて南北3.0m・東西約1.5mの調査区を設定し、機械および人力で掘削をおこなった。確認した遺構面は1面のみである。

遺構面は現地表下約25cmの深さに存在する。地表から、厚さ10cm以下の整地層・暗灰色シルト層が続く。暗灰色シルト層からは、一錢硬貨1点が出土した。その下層に厚さ約15cmの暗灰黄色シルト層があり、その直下で灰色粘土層をベース層とする遺構面があらわれる。

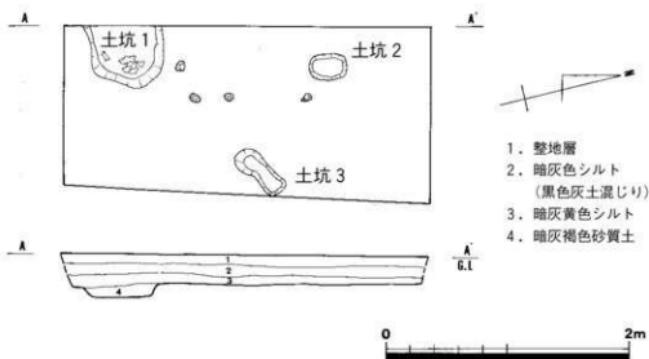
遺構は土坑3箇所、杭痕4箇所を検出した。いずれも暗灰褐色砂質土をその埋土とする。調査区南西隅付近で検出した土坑1は、径約70cm・深さ約10cmを測り、調査区の西側へ広がる。第12図1~5の遺物は、すべて土坑1の底から出土した。なお、これらの遺物と近接して、径5cm程度の筒状を呈した中空の粘土塊が遺存した。おそらくは、花立てのような木製あるいは竹製等の有機質の筒形の器が据えられていたのであろう。



第9図 陶邑案跡群06-03区位置図



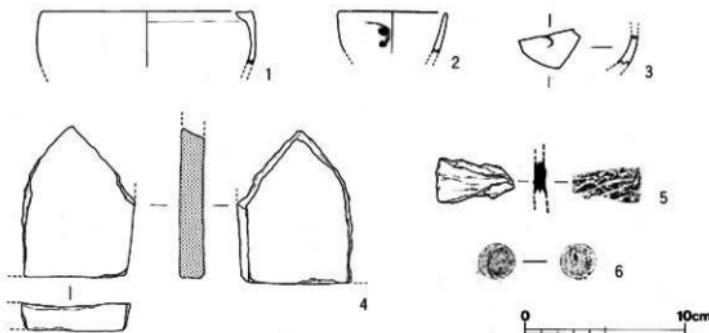
第10図 陶邑窯跡群06-03区調査区配置図



第11図 陶邑窯跡群06-03区遺構平面図

1の遺物は磁器香炉で、口径13.2cm・残存高3.4cmを測る。2は染付小碗で、口径6.8cm・残存高2.6cmを測る。3は染付中碗と思われる小片である、4は平瓦片で、厚さ1.5cmを測る。いずれも近世後期以降の所産であろう。5は古墳時代後期の須恵器窯跡小片で、青灰色の色調を呈し、内面に青海波文が観察できる。当該調査区は、須恵器窯跡を造営するのに適した高位段丘斜面からほど近いところに位置するため、そうした近在の窯跡出土遺物が土坑1に混入したものと思われる。上層から出土した6の一錢硬貨は、径2.3cmを計測する。鋸が激しいため詳細な観察は不可能だが、大正5年～昭和13年に発行された桐一錢青銅貨と考えられる。

以上の知見から、土坑1を含む遺構は、近世後期以降に形成されたものと推定されるが、第2次大戦以前には廃絶していたと判断される。

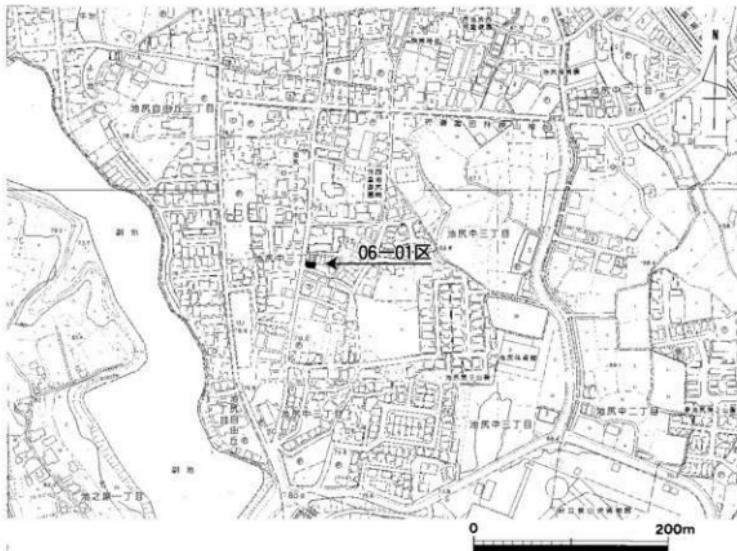


第12図 陶邑窯跡群06-03区出土遺物

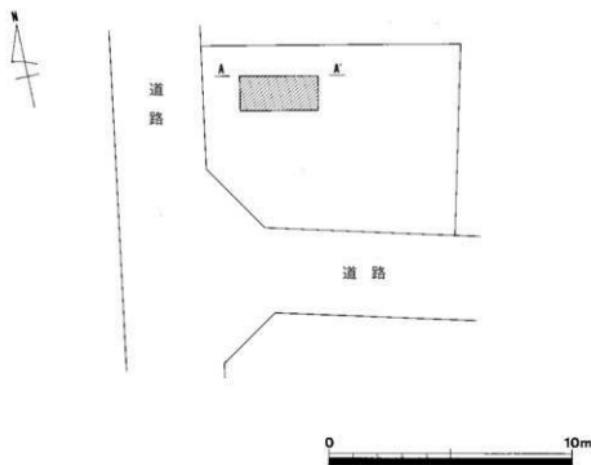
## 2. 池尻城跡

### 06-01区

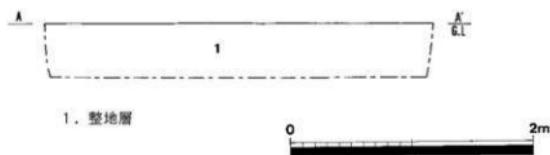
本調査区は池尻中三丁目541-2、538-21に所在する。住宅の建築に伴って事前発掘調査を実施した。予定される建築物の規模に合わせて東西3.2m・南北1.5mの調査区を設定し、機械および人力で掘削をおこなった。06-01区付近の既応の発掘調査においても、中近世の遺構が検出されたことがあるため、池尻城跡に関連した遺構・遺物の確認を期待した。しかし、予定建築物の基礎深度である地表下45cmまで掘削し、土層断面観察および遺構検出を試みた結果、掘削は整地層内にとどまり、遺構・遺物を検出することはできなかつた。当該地地点における遺構面は、地表下1m程度の深度に位置するのではなかろうか。



第13図 池尻城跡06-01区位置図



第14図 池尻城跡06-01区調査区配置図



第15図 池尻城跡06-01区土層断面図

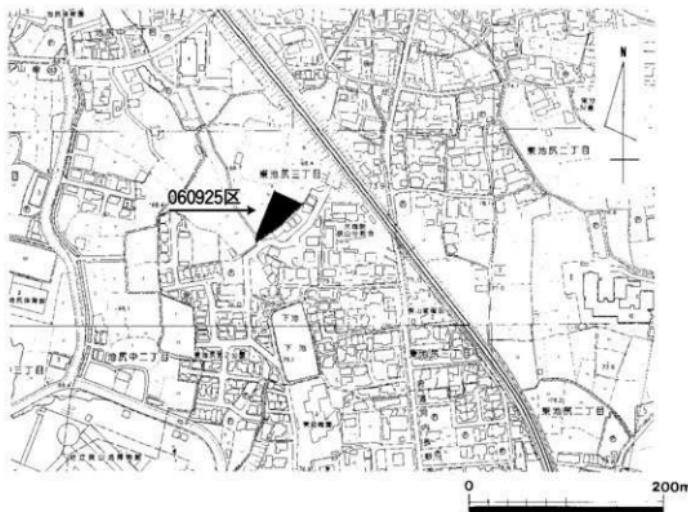
### 3. 範囲確認調査

#### 060925区

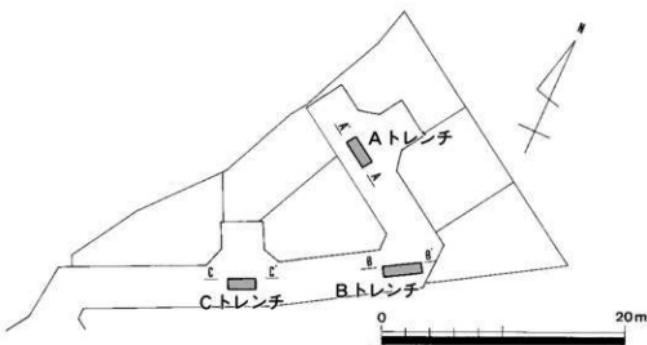
本調査区は東池尻三丁目994、2551-3、991-10の各一部に所在する。埋蔵文化財包蔵地の範囲外にある。ただし、狹山藩陣屋跡の北西に隣接するため、周辺域における開発時においても、範囲確認のための試掘調査を隨時実施し、遺構・遺物の有無を確認してきた。今回は、分譲宅地の開発に先立ち、1,045.08m<sup>2</sup>の開発区域を対象に範囲確認調査を実施した。

同開発の土地利用計画で道路部分として予定されている箇所において、3本のトレンチを設定し、土層断面観察を行った。もっとも北方に設定したAトレンチは長さ2.6m・深さ1.2m、東方に設定したBトレンチは長さ3.3m・深さ1.1m、西方に設定したCトレンチは長さ2.3m・深さ1.0mで、それぞれの幅は約1.5mである。Aトレンチでは、地表下20cmまで耕土層が、その下層に厚さ15cmの黄色粘土層が、その下層に厚さ30cmの暗灰色シルト層が、その下層に厚さ28cmの暗灰褐色粘土層が、その下層に厚さ25cmの暗灰色疊砂土層が、その下層に厚さ22cmの暗黄色粘土層が観察された。Bトレンチでは、地表下25cmまで耕土層が、その下層に厚さ28cmの灰褐色砂疊土層が、その下層に厚さ14cmの灰褐色砂質土層が、その下層に厚さ30cmの暗灰色砂疊土層が、その下層に厚さ40cmの暗灰色砂質土層が、その下層に厚さ36cmの暗灰青色砂疊土層が観察された。Cトレンチでは、地表下20cmまで耕土層が、その下層に厚さ10cmの暗灰色疊砂土層が、その下層に厚さ19cmの灰褐色砂質土層が、その下層に厚さ8cmの暗灰色砂質土層が、その下層に厚さ16cmの黄灰色シルト層が、その下層に厚さ24cmの灰青色砂疊土層が観察された。いずれの土層中からも遺物の包含を確認することはできず、遺構らしき痕跡も確認することはできなかった。

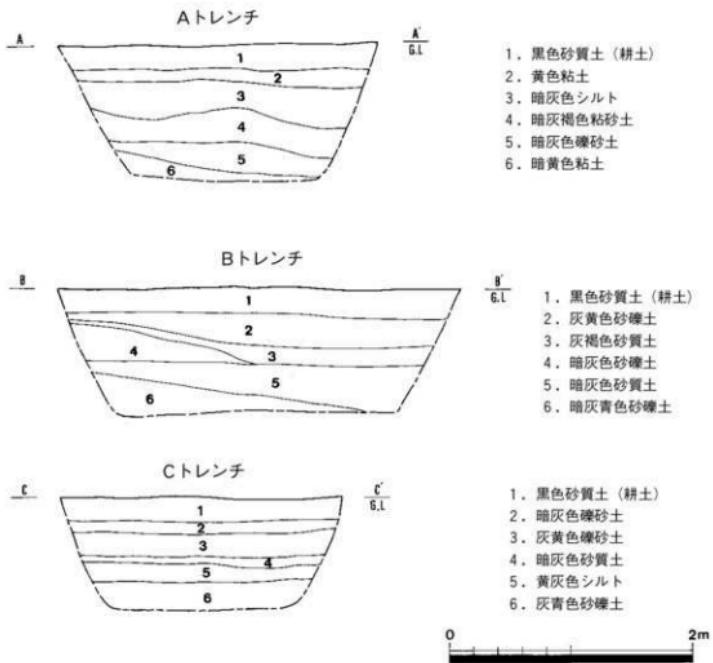
当該調査区は、狹山藩陣屋跡が所在する中位段丘よりも一段低い沖積低地に立地しているため、地山面を検出するにはさらに深い掘削が必要とされるようである。本市域内の沖積低地では、大規模な開発が従来あまり生起しなかったため、埋蔵文化財包蔵地として範囲指定した箇所が少ない。だが、狹山池北方における開発時に池尻遺跡が新規発見されたように、河川・水路から容易に配水することが可能な沖積低地には、用水路の整備および中位段丘上の開発が飛躍的に進んだ近世よりも以前の、古代から中世の水田跡やこれに間連する遺構が、未発見のまま遺存している可能性がきわめて高いものと推定される。今後とも機会を捉まえて、こうした地域の埋蔵文化財包蔵地範囲確認を進めていきたいと考えている。



第16図 範囲確認調査060925区位置図



第17図 範囲確認調査060925区トレーンチ配置図



第18図 範囲確認調査060925区土層断面図

## まとめ

個人住宅等の開発を対象とした平成18年度の発掘調査は、いずれも小規模な調査が中心であり、一定の成果が得られた調査件数も少なものであった。陶邑窯跡群では、06-01区・06-02区・06-03区で事前発掘調査および発掘調査を実施し、池尻城跡では06-01区で事前発掘調査を実施した。また、埋蔵文化財包蔵地外において、範囲確認のための試掘調査を060925区で実施した。

陶邑窯跡群06-01区および06-03区では旧天野川左岸の段丘上で営まれた近世集落跡の一部を発掘した。国の登録文化財である辻家住宅に代表される大きな民家が建ち並ぶ、この地域の近世における土地利用の詳細な状況等は不明であるが、池之原の旧道沿いを中心に大小の民家が建てられ、西方の高位段丘側から狭山池主谷方向へ伸びる幾筋もの浅い開析谷の水を小規模な溜め池で貯留して水田へと導水し、水掛かりから外れる土地は畠として利用されていたのであろう。

また、陶邑窯跡群06-03区では、6世紀代の須恵器壺片が近世遺構に混入して出土した。高位段丘斜面に築かれた須恵器窯跡が、近隣において新規発見される可能性もあるため、今後、付近の開発時においては注意が必要である。

本報告書作成を進めている平成19年3月、東野廃寺において06-01区の発掘調査を実施し、近世中頃に復興して成立した蓮光寺に葺かれていたと推定される大量の瓦を用いた近世整地層を検出したが、遺物の整理および調査研究には相応の期間が必要とされるため、この東野廃寺06-01区の発掘調査報告については「大阪狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書18」において実施する予定である。

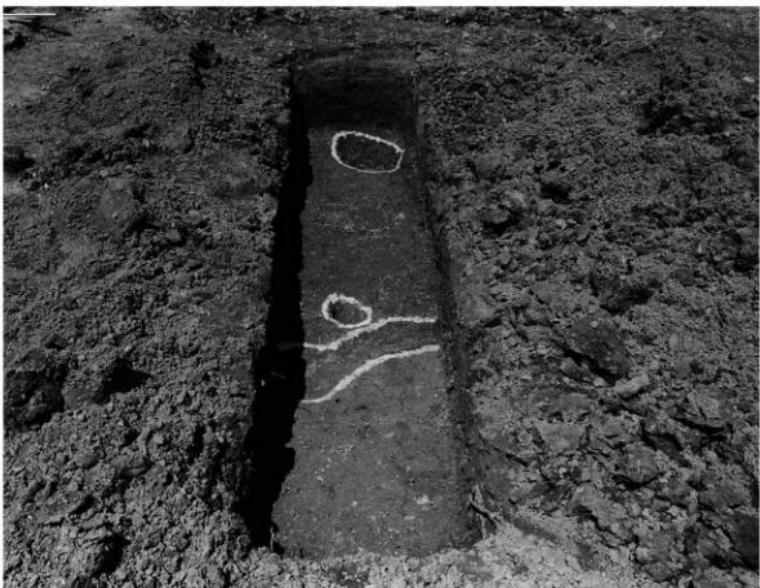
## 報告書抄録

ふりがな	おおさかさやましないいせきぐんはくつちょうさかいようほうこくしょ17					
書名	大阪狭山市内遺跡群発掘調査報告書17					
副書名						
シリーズ名	大阪狭山市文化財報告書					
シリーズ番号	34					
編著者名	植田隆司					
編集機関	大阪狭山市教育委員会					
所在地	〒589-0011 大阪府大阪狭山市狭山一丁目2384-1 TEL.072-366-0011					
発行年月日	西暦2007年3月30日					
所蔵遺跡名	所在地	コード 市町村	調査区	北緯	東經	調査面積 m <sup>2</sup>
すえむらかまあとぐん 陶邑窯跡群	おおさかさやま 大阪府大阪狭山市	27231	—	06-01 34° 30'42"	135° 32'20"	5.0
				06-02 34° 29'36"	135° 32'33"	5.6
				06-03 34° 30'16"	135° 32'37"	4.5
いけじりじょうあと 池尻城跡	おおさかさやま 大阪府大阪狭山市池尻中	27231	—	06-01 34° 30'33"	135° 32'57"	4.8
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
陶邑窯跡群	生産遺跡・集落跡	古墳時代・江戸時代	06-01区 土坑・溝・ピット 06-03区 土坑・杭痕	06-01区 染付碗・陶器壺 06-03区 磁器香炉・染付碗・須恵器壺		
池尻城跡	城館跡	—	—	—		

# 図 版



a 北方から



b 南方から

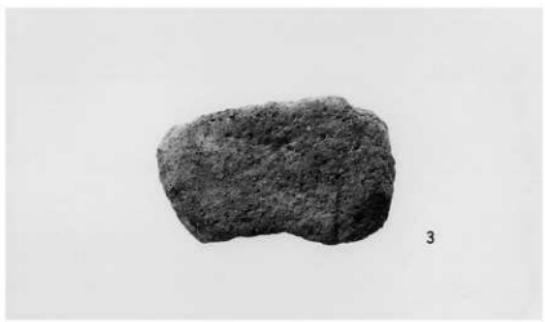
図版2 陶邑窯跡群06—01区 出土遺物



1



2



3



a 西方から



b 南東から

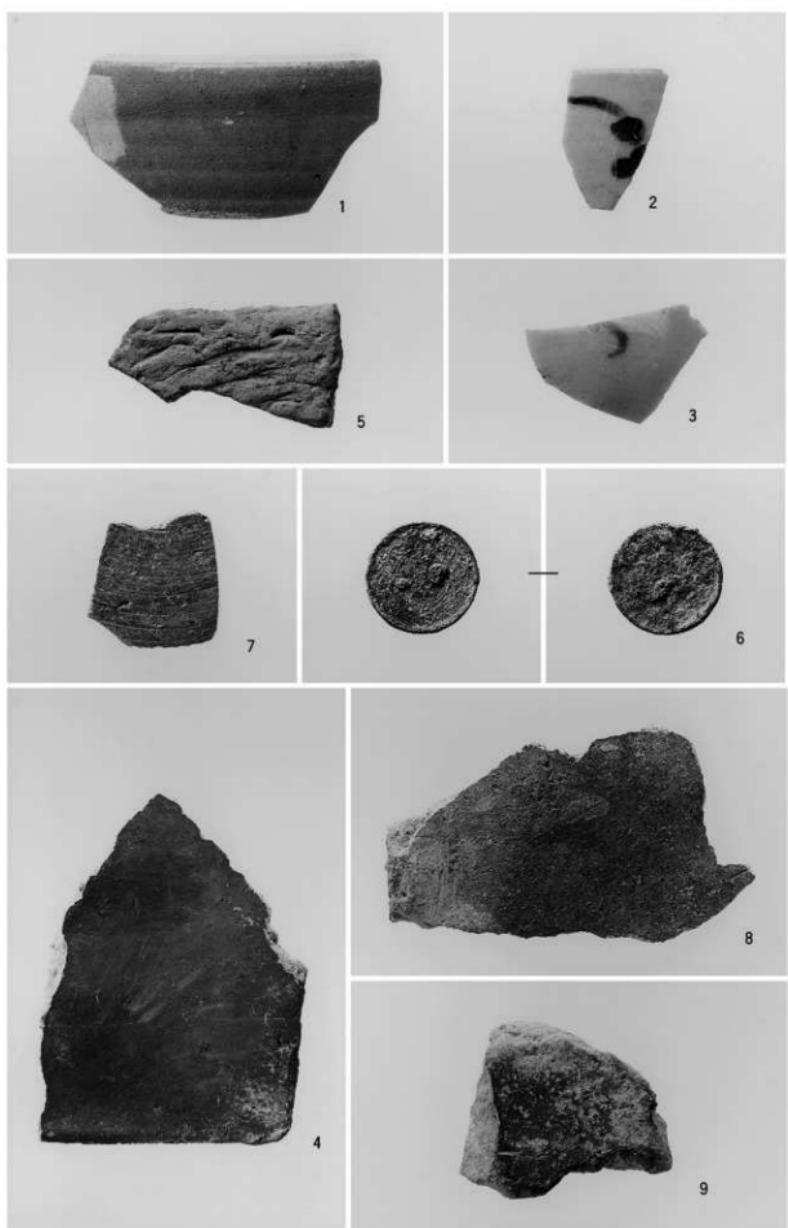


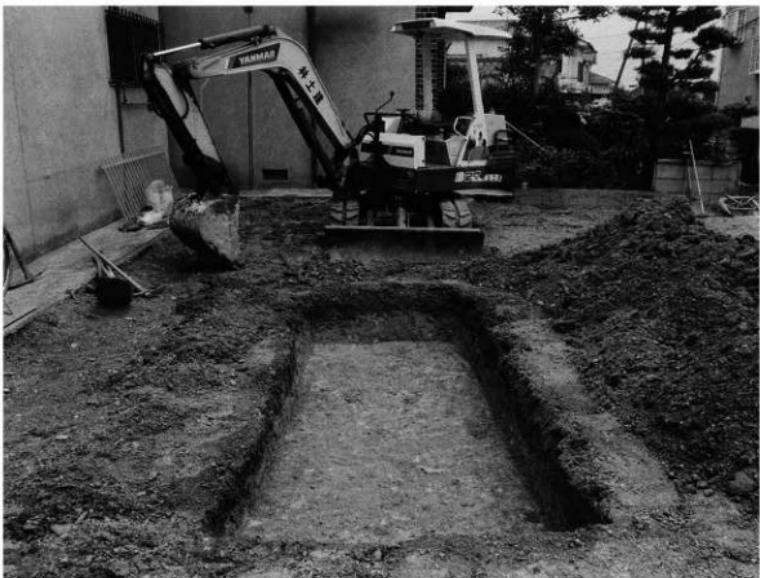
a 北方から



b 土坑 1 遺物出土状況

図版 5 陶邑窯跡群06—03区 出土遺物





a 西方から



b 東方から



a 南方から



b 北西から

大阪狭山市文化財報告書34

**大阪狭山市内遺跡群発掘調査概要報告書 17**

発 行 日 平成19年(2007年)3月30日

編集・発行 大阪狭山市教育委員会

大阪府大阪狭山市狹山一丁目2384番地1号

印 刷 橋本印刷株式会社

奈良県葛城市竹内365番地1